

藤井加代子名誉教授

藤井加代子名誉教授
年譜・著作目録

〈年　　譜〉

＜経歴＞

・昭和45年4月　同志社大学文学部英文学科入学
・昭和49年3月　同志社大学文学部英文学科卒業（文学士）
・昭和49年4月　（株）東京銀行名古屋支店勤務（至る昭和50年3月）
・昭和50年4月　名古屋大学教育学部聴講生（至る昭和51年3月）
・昭和51年4月　同志社大学大学院文学研究科英文学専攻入学
・昭和59年3月　同志社大学大学院文学研究科英文学専攻博士課程前期修了（文学修士、中学、高校英語教員資格一級取得）
・昭和59年4月　愛知女子短期大学非常勤講師（英語）（至る昭和61年3月）
　金城大学短期大学部非常勤講師（英語）（至る昭和62年3月）
・昭和61年4月　愛知女子短期大学（教育職員、人文学科専任講師）
・平成2年4月　愛知女子短期大学助教授
・平成12年4月　名古屋外国語大学外国語学部英米語学科に異動
・平成24年4月　名古屋外国語大学外国語学部英米語学科教授

〈著作目録〉

＜主著＞

Virginia Woolf: Phenomenal Aspects of her ‘Moment of Being’
昭和60年3月、単著『愛知女子短期大学研究紀要 人文編』 第18号

ジェイン・オースティン『説得』の評価――変奏から新しい主題へ――
昭和63年3月、単著『愛知女子短期大学研究紀要 人文編』 第21号

ヘンリー・ジェイムズ作『ロデリック・ハドソン』――その魅力と重要性――
平成元年2月、単著『愛知女子短期大学研究紀要 人文編』 第22号

カズオ・イシグロ作『日の名残』― 一人称の曖昧さの魅力―
平成3年2月、単著『愛知女子短期大学研究紀要 人文編』 第24号

Muriel Spark：ヨブ記のテーマについて
平成4年3月、単著『愛知女子短期大学研究紀要 人文編』 第25号

ドストエフスキィー作「おとなしい女」を読む―質屋の主人の「語り」について―
平成8年3月、単著『愛知女子短期大学研究紀要 人文編』 第29号

Hermione Lee作 伝記『ヴァージニア・ウルフ』を読む：伝記作家V. ウルフの伝記
平成11年3月、単著『愛知女子短期大学研究紀要 人文編』 第32号

ミュリエル・スパーク作、『援助と幇助』――テーマと形式における二重性――
平成16年8月、 共著『表象と生のはざまで』山下昇他編者、南雲堂

マーティン・スタナード作、『ミュリエル・スパーク　伝記』――スパークの「作品と人生の関係」とスタナードの“the nevertheless idea”――
平成22年2月、『名古屋外国語大学 外国語学部紀要』 第40号

（他13編）

献　辞

藤井加代子教授は、2016年3月末日をもって名古屋外国語大学を退職されました。先生は学校法人中西学園とのご縁が深く、非常勤講師として愛知女子短期大学で教鞭をとられ始めた1984年4月から数えますと、実に、30有余年の長きにわたります。先生の大学英語教員としての歴史は中西学園における英語教育の歴史の一部であるとも言えます。先生は、2000年4月に愛知女子短期大学から本学に准教授として異動され、2012年4月に教授に昇進されました。この間、先生は本学の教育、学生指導および英文学研究に指導的な役割を果たされ、在職中の多年にわたるご功績により、2016年4月1日付で名古屋外国語大学名誉教授の称号を授与されています。

先生の英文学研究は「ヴァージニア・ウルフの著作を全部読むのが目的で、私は仕事を辞め、大学院に入学した」時から始まります（Artes MUNDI Vol.1, p.30）。そして、一人の作家の膨大な作品を読むことを至上の喜びとし、またそれらと格闘しながら、ウルフ作品に共通する主題と手法と語りの問題に関する緻密な論考を次々と執筆なされました。先生の研究はジェーン・オースチン、ヘンリー・ジェームズ、カズオ・イシグロなどへと広がり、本学に移られてからは、現代作家ミュリエル・スパーク（2006年88歳で死去）の最新作を中心に独自のスパーク論を集中的に発表されるようになりました。先生は『高慢と偏見』、『嵐が丘』、『闇の奥』、『自分一人の部屋』など英文学の代表的作品をご自身のゼミで使用されていました。多くの聴講学生たちは、先生が語る英文学のエッセンスに心を打たれ、文学を純粋に喜ぶことができたと思います。

先生が学科の教務委員を務められた数年間は、専攻語学科目の改善を目指した新カリキュラム作成の時期と重なって、多忙を極めていました。現在の英米語学科カリキュラムには特筆すべき特徴が二つあり、先生はリーディング科目コーディネーターとして、どちらにも精力的にその整理改編

作業に取り組まれました。一つは、リーディング科目を多読と精読の二種類に分け、コーディネーターを中心に、新たな授業目標の設定、テキストの選定、共通シラバスの作成を検討し決定するという授業運営方式であり、もう一つは、語彙力強化のための語彙テストの実施です。これらは今後に継承していくべき英米語学科の大切な教育方針に成長しています。共通の授業方式に向けて、多くの大学英語教員の賛同を得ることがどれだけ難しいかを考えますと、このように最適なカリキュラムを編成していただいたことに、心から感謝したいと思います。

先生には国際交流委員としてのお仕事もありました。本学では留学する学生が年々増加し、国際交流委員の役割がますます重要になってきています。複数の留学プログラムが走る英米語学科においては、年間100人を超す学生が留学するようになり、留学生選抜を行うのも単純な仕事ではなくなりました。先生は、従来の方式に代わる新しい適性かつ効率的な選抜方法を考案し、実現させられたのでした。

先生の温かいお人柄と柔和なお言葉は誰しも知るところであり、私たちは先生とお話をするたびに、信頼と安心の安らいだ気持ちを得ることができました。木々や草花をこよなく愛し、絵画や音楽の知識も豊かな先生のことですから、新しい季節が巡ってきたのを幸いに、ますますご健康で、人生を謳歌なされることであろうと思います。

英米語学科長
浅川　照夫